

幼年童話から児童小説まで

児童文学の書き方

西本鶏介



児童文学の書き方



児童文学の書き方

NDC 907 偕成社 198p 19cm 1983年

発行 1983年4月 初版第1刷

著者 西本 鶏介

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話(03)260-3229 振替 東京5-1352番

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

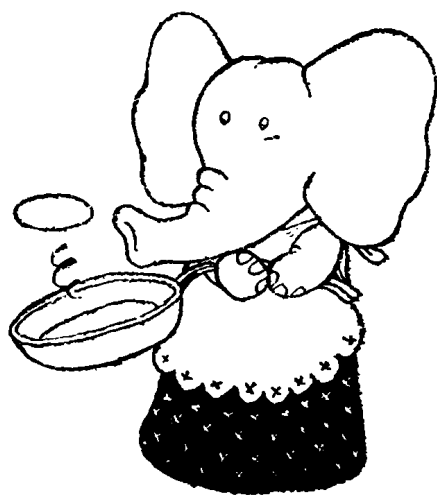
ISBN4-03-003060-0

©西本鶏介 1983

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

児童文学の書き方●目次



I 児童文学の書き方

1	なぜ児童文学を書くのか……………	8
2	大人の文学とどう違うのか……………	14
3	なにをどう書くか……………	20
4	作品の面白さとはなにか……………	26
5	個性的な方法を生み出す……………	32
6	ファンタジーの方法(その一)……………	39
7	ファンタジーの方法(その二)……………	45
8	現実を描く方法……………	52
9	娯楽小説の方法……………	59

II 幼年童話の書き方

10	歴史小説の方法……………	66
11	ノンフィクションの方法……………	72
12	物語にふさわしい文章を書く……………	79
1	幼年童話の大切な条件……………	88
2	テーマは自然にわきあがってくる……………	95
3	素材を効果的に生かす……………	102
4	童話の面白さはストーリーできまる……………	108
5	現実の中の子どもを描くとき……………	114

6	もう一つの国を描く(その一).....	121
7	もう一つの国を描く(その二).....	127
8	表現力を身につける.....	133
9	ユーモアを生かすには.....	140
10	なぜ、動物を擬人化するのか.....	146
11	昔話に学ぶお話づくり.....	153
12	創作民話を考える.....	159

III	戦後の児童文学はどう変わってきたか.....	167
-----	------------------------	-----

どんな勉強法があるか.....	185
-----------------	-----

あとがき.....	192
-----------	-----

参考作品リスト.....	194
--------------	-----

そうてい・村上
勉

I 児童文学の書き方



1 なぜ児童文学を書くのか

文学とはなにか、人によってさまざまな考え方はあっても、煎じ詰めれば、人間とはなにかを文章によって表現する芸術ということができます。児童文学も文学である限り、この本質にかわりはありません。しかし、どれほどすぐれた文学であっても、それが子どもたちに理解されなくてはならないものなのです。ですから、児童文学の児童というのは、子どもにも読める文学の条件と思えばいいでしょう。つまり児童文学とは、子どもの理解力や読書能力にこたえることのできる文学ということができます。

かつての児童文学といえば、子どもに役立つ文学、子どものためになる文学という考え方が中心であったようですが、近頃は子どもにも読める文学、大人も子どもも共有できる文学という考え方をする人が多くなりました。それだけ児童文学の幅が広くなり、中には子どもより大人に読

1 なぜ児童文学を書くのか

まれる作品も少なくありません。しかし、児童文学と名のつく以上、その読者は、まず子どもであることが前提でしょう。子どもにはチンパンカンで、大人だけによろこばれる児童文学なんてものはないように思います。それは、もはや児童文学である必要はなく、れっきとした大人の文学と呼んでさしつかえありません。

もっとも児童といっても幼児から中学生までいるわけで、中学生ともなれば大人の文学だって自由に読みこなすことができます。ですから、どこまでが子どもの文学で、どこからが大人の文学なんて分け方はナンセンスということにもなりましょう。だからといって児童文学者の書いたものなら、なんでもかでも児童文学と思いこむのは考えものです。子どもを意識せずに書かれた小説まで児童文学として読んだり、読ませたりする必要はありません。

詩人であり、小説家であり、童話も書く三木卓は次のようにのべています。

『児童文学はまちがいなく文学である。それ以上でも以下でもない。……児童文学とは、小説や詩や戯曲と同じような、一つの文学ジャンルであって、それ自身自律的に存在しているのである。そしてわたしがこのジャンルにここ数年関心を持ち、そして今後もそうであると思われるのは、わたしがこどもたちのためによみものを書いてやりたいためではない、と思う。本当のことを言えば、わたし自身の自己表現にとって、この文学が実に魅力的であり、可能性にみちていると思う

からである。思うに人間は、他者のために文学を創り出すことはできない。わたしたちには自分を語ること以外のことは不可能なのであり、たまたま、その自分が他者を多く包含し得ていたかどうか、ということに過ぎないのである。ならば、たとえ相手が少年少女であるにせよ、わたしたちは、そのものらのために何かを語ってやることなど、とうてい不可能であることはもちろんである。児童文学もまた、これらの読者に対しても、大人に対する同じように完全なる他者として立ち現われなければならない。そうでなければ、文学は何ものでもあり得ないだろう。事実、わたしが読んで感動した作品はそういうものだ』〔『児童文学——この輝かしい世界』Ⅱ『朝日新聞』昭和46年2月27日号〕

つまり児童文学も文学の一ジャンルであり、子どものためではなく、自己表現の文学としての魅力的で、可能性にみちたものであるということです。

では、大人である作家が、なぜ子どもの文学を書こうとするのか。三木卓は、それを表現方法の魅力にあるといいます。とりわけ童話の方法は詩人たちにとって魅力的らしく、近頃は童話を書く詩人が少なくありません。童話の世界では、現実の世界では通用しないことも通用します。不可能なこともすべて可能になり、見えないものも見ることができます。そこでは人間の根源にたちかえって、いきいきと人生を見つめ、社会を考えることができます。自分の内部にある意識

すらも自由に作品化することが可能です。

言葉がイメージを呼び、イメージがリアリティを持つ童話世界のできごと。それはどんな読者とも、さまざまな形でかわりあうことができるし、偏狭な日常性を越えて、現実の向うの国までも見せることができます。

たとえば宮沢賢治。彼はどうして童話を書いて大人の小説を書かなかったのでしょうか。梅原猛は、その理由を次のように説明しています。

『しかし、賢治は小説や詩が書けなくて、詩や童話を書いたのではない。彼は自己の世界観の必然から、詩と童話を書いたのである。彼にとって、明らかに、動物も植物も山川も人間と同じ永遠の生命をもっているはずであった。その生命の真相を語るのに、どうして、人間世界のみを語る小説という形をとる必要があるろう。（中略）ここでは動物は人間と対等な意味をもつ。動物も人間と対等な同じ生命をもっているのである。そして、そこでえがかれるのは、動物と人間が共通に持っている生命の運命である。賢治は、童話によって人間世界を風刺して、人間世界を改良しようとしたのではない。むしろ、人間が動物をはじめとする天地自然の生命と、いかにして親愛関係に立つべきかを示したのである。』（『修羅の世界を超えて』・『宮澤賢治研究』Ⅱ筑摩書房）

つまり賢治にとっては童話こそが、宇宙的生命への理想を語るにふさわしい場所だったので。

童話というすぐれた方法によって、自分の心に見える真実、科学と宗教の融合する理想世界を、いきいきと描き出しました。

こうしてみると、児童文学とて、まぎれもなく自己表現の文学であり、子どものために書くか書かないかは、それほど重要でないということになります。しかし、児童文学である以上は、まったく子どもを意識しないで書くことはできません。表現はもちろんのこと、なぜ子どもに向かつて書くのかの問いかけが必要です。中には問いかけどころか、それを強く意識することで児童文学を書くのだという人もいます。人間の本当の生き方とはなにか、社会の不正に対して子どもはどうあるべきかを子どもに語り続ける作家もいるのです。

私は、いまでも子どもの心を持ちたいと思うことがあります。山の向うになにかいいことがあるような気がして野中の道をどこまでも歩き続けた自分にかえりたい。雷を本気でつかまえようとして何時間もがんばった子どもの頃をとりもどしたいとも思います。向うみずな冒険心、生命あるもののふしぎさに打たれたあのみずみずしい感情の世界、一途な正義感をもって、不正には思いきり怒りをぶつけ、他人の不幸にも声をつまらせて泣けるやさしさ、そんな人間性を少しでも喚起できたらと思わずにはいられません。その欲求を充たしてくれるのが児童文学です。しかも、人間であることのすばらしさを存分に味わわせてくれる文学、そんな児童文学に限りない夢

1 なぜ児童文学を書くのか

をたくしたくなります。

いいかえれば、人間そのものである子どもの姿を通して、生きることの意味を、かがやかしい未来へのよろこびを、だれもが楽しめる方法によって書かれるのが児童文学ということになります。そのためには、意識する、しないにかかわらず、子どもとはなんであるのか、子どもの心は、なにをどんな風に感じようとするのか、それが理解でき、たとえ自己表現であっても、子どもの心につながる表現力が必要です。作家としての大人の目と、子どもの世界をつかみとれる豊かな感受性なくしては、すぐれた児童文学を生みだすことはできないでしょう。

2 大人の文学とどう違うのか

児童文学も大人の文学と本質的に変わりのないことはすでにのべました。では大人の文学とどう違うのか。子どもにも読めることが第一条件といっても、それだけでは、なんとなく曖昧です。童話と小説の違いならある程度の説明もつきますが、大人の小説と子どもの小説との違いとなると簡単に割り切れることは困難でしょう。

たとえば夏目漱石の『坊っちゃん』。子ども向きの名作全集には必ず入れられるほど、子どもたちに広く読まれています。でも、漱石は、これを児童文学として書いたわけではありません。

それでは子どもを主人公にして、子どもの気持ちを書いたものなら児童文学になるのかというと、いちがいにそうともいいきれません。少年の日の魂の軌跡をいきいきと描き出した井上靖の『しろばんば』は、子どもにも読めるすぐれた小説ですが、れっきとした大人の文学です。なら